

オシリス(Osiris)かサラピス(Sarapis)か

岡 島 誠 太 郎

- (一)序——ヘロドトスの場合 (二)希臘人の外國人觀 (三)事物名に就て (四)地名に就て (五)人名に就て
 (六)神名に就て (七)希臘文化の浸透と希臘的考察 (八)埃及の特殊性 (九)研究法上の立場 (一〇)結語——
 サラピスのよりオシリス的に

(一)序——ヘロドトス(Herodotos)の場合

歴史の祖、ヘロドトスの所傳には正確なる記事も少くはないが、古代埃及に關して相當誤りも録せられて居る。

例へば、希臘人の傳へるケオプス(Cheops)——正しくはクフ(Khufu)——のピラミッドを造營するに當つて

その王女を娼家に送つて費用の捻出を計つたと云ふが如き、他より聞き傳へたのを其の儘録した事、或はこのピ

ラミッドの外壁に記された文字を見て、野菜、葱等の計

量記載となし、銀一千六百タレントと云ふ数字より全工程の費用を推算した事等がそれである。此等は固より觀光案内人の場當りのな興味本位の説明を、その儘受容れて記録した事より起る譯で、この種の説明は古今東西を通じて屢々現はれる處である。

併し、その他にヘロドトス自身の判断が加へられたものがある。例へばナイル(Nile)——正しくはニール——の定期氾濫の理由を擧げて、その想定し得る三つを述べ

その第三の説は最も巧妙なるが如きも、最も事實に離れたるものと彼はして居る。即ちナイルの河は雪解水が流れ來ると云ふが、酷熱の地より涼しき地向ふ流が、如何して雪の堆積せる個所を源とするだらうかと疑つて居る、かくてその理由に及び、更に自説を纏述して認識の不足振りを示して居る。これ素より當時の地理的智識の甚だ不完全なる點より見て、彼のみに責めを負はすべきでないと云へるであらう。

更に彼が、埃及人の特殊なる風習を擧げて、希臘人は文字を書くに左より右に進み、埃及人は右より左に進む(註4)即ち前者の文字は左行し、後者は右行すと述べてゐる。

凡そ異域に歴遊する旅客にとりては特異性に心が惹かれるは勿論であるが、埃及の文字には所謂左行のものもある。現在歐米にて刊行されるテキストの類は大部分左行であるが、これは歐米人の立場から読み易いやうに斯くしたものと解せられる。本来、右も左もあつたものでない。中央より左右に分れて讀むべき特殊なる場合さへステレには屢々見られる。又、オペリスク(Ophelisk)の

如きは、その形状の上から、上より下に向つて、所謂縦書きのものが多し。その點、融通無碍と云ふべきか、孰れでもよろしいと見られる、尤も下より上に進むのは見當らない。

ヘロドトスは、これら埃及に當時存して居た遺物を觀たことであらうが、埃及繪文字の智識がなかつたと思はれる以上、彼を非難するは酷であるが、彼が事實を傳へたとは云ひ得ない。

尙、彼は「ヘラクレス(Heracles)」と云ふ名稱は、埃及人が希臘より傳へたものではなくて、寧ろ希臘人、特にアンフィトリオン(Amphitriion)の子をヘラクレスと呼ぶ。希臘人はこの名を埃及より傳へた證據が多い——(中略)——ヘラクレスは實に埃及古神の一つで、此の國人の言葉に従ふとアマシス(Amasis)の治世以前一萬七千年の昔、八つ柱の神の數が増加して十二柱の神となつたが、ヘラクレスは實にその一であつたと云つて居る。(註5)

これは全く、彼が歴史を充分辨へず、當時の埃及が希臘文化の影響を如何に受けて居たかを知らなかつたと云は

ねばならない。

固より、本稿に於てヘロドトスを特に論ずるものでもなく、叙上の如きは既に周知の程度で、今更擧ぐるのも如何かと思はれる位である。

併しながら、相當、埃及人に對して理解と好意とを有するやうに見え、「この國人の神を崇敬することの篤く深いのは世界諸國の民に冠絶して居る」と讚め、自ら親しく、踏査した一希臘人たる彼の觀察記録として視るとき

多くの希臘人に於て埃及の眞を傳へ得たる者、果して幾何あるかの歎聲を發せざるを得ないのではなからうか。

ヘロドトスを以て、全斑を推定するの正しくない事は云ふ迄もない所であるが、茲に比較的よく知られたる古代埃及に關する彼の記述を擧げ、希臘人たる彼が、當時の情勢にも制せられたとは雖も、埃及の眞をよく傳へ得なかつた所以を本稿の序として明にした次第である。

素より一部の難著の云ふが如く、彼を目して「虚言者の祖」となすのは採らない所である。

(註 1) Herodotus: Bk II 126

オシリス(Osiris)かサラヤヌ(Sarapis)か

(註 2) Ditto: Bk II 125

(註 3) Ditto: Bk II 22

(註 4) Ditto: Bk II 43

(註 5) Ditto: Bk II 37

(二)希臘人の外國人觀

由來、孰れの國民乃至民族でも、他國民及び異民族に對して蔑視し、卑稱を以て之を呼んだことは、その例が決して乏しくない。漢民族の東夷北狄南蠻西戎の如きそれである。

希臘人もまたさうである。即ち自國民以外に對して、

バルバロス(Barbaros)

(註 1)

と呼んだ。これは、他の言語を蔑

しむ、所謂「馘舌」の意味で、不可解なる言葉を繰る者の謂であつた。斯くて希臘語を尊重するのは顯著なものであつた。

そこで希臘人以外でも、希臘語を解する者は教養ありと認めて居た。新約聖書の中にも、特に希臘語を話すユダヤ人を擧げ、希伯來語を話すユダヤ人とを區別して居る。

即ち、使徒行傳第六章第一節には、「そのころ弟子のか

ず増加はり、ギリシヤ語のユダヤ人、その寡婦らが日々の施濟に漏されたればヘブル語のユダヤ人に對して咬く事あり」と明にある。即ち *עַבְדֵי הַיְהוּדִים הָיוּ רֹבֵי הַיְהוּדִים* と希臘語の聖書にはなつて居る。前者は *Hellenizes* と云ふ文字を以て *Hellen* と區別して居る。英語では

Grecians として居る。尙、使徒行傳、第九章第二十九節にも前者が記されて居る。唯、事實上稍々疑しいのは第十一章第二十節と云はれて居るが、必らず希臘人たるを明にする場合は第十四章第一節に、「ユダヤ人およびギリシヤ人……」とあるが如く、*Ἰουδαῖοι* となつて居る。兎に角、希臘語を話すユダヤ人と希伯來語を話すユダヤ人との間に反目のあつた事は興味ある問題ながら、今は觸れない。

斯く自國語を尊重した希臘人は、希臘語にない外國語の音を移す場合に甚だ不親切であつた。否自己中心であつた。希臘語に存しない音は、何か似通つた音を以て代用させる場合もあつたが、中には全然省略して顧みなかつたと解せられる場合もあつた、現在に於て日本人が、

支那の固有名詞を云ふ場合に、全く省略しようとはせない迄も、似たもので濟しておくのが多いが、然も歐洲の字音を移すのに、或はウに濁音の符を打つてvの音を、タ行に半濁音の符を加へてuの音を傳へむとするだけの忠實さはなかつたと云はねばならない。

波斯の大王ダリウス(Darius) Gr. (*Δαρείος*) はダラヤヴス(Daryavus)、クセルクセス(Xerxes Gr. [*Ἄχαιμνης*]) はクシヤルシヤ(Kishayarsha)、アルタクセルクセス(Artaxerxes Gr. [*Ἀρταξέρξης*]) はアルタクシヤトラ(Artakshatra)とあるべきが訛つたのである。

尤も日本の固有名詞を悉々羅馬綴に書いても、歐米人の大部分は、その法則を學ばないで勝手な讀方をする。

神戸(Kobe)をコーブ、門司(Moji)をモジヤイ、柴四郎(Shiba Shiro)をシヤイバ・シヤイロと讀む。甚しいのにならと箱根(Hakone)をヘイコーン、とかハクワンなどと讀む輩が居る。(註2)

名稱はものの符牒に過ぎないと見る人は兎に角、稱呼により、意味、内容が探らるゝ場合、「名は實の賓」とも

云はれる以上、決して忽に取扱はるべきでない。筆者はアルタクセルクセスとはクセルクセスに接頭語的アルタが附加されて居ると永く思惟して居た。ところが、大部差があることを始めて知つた。斯くてこれが「國の法」なる謂を知ると共にサトラップ (Satrap Gr. [Sapereis]) も、實はクシヤトラバ (Kshatrapa) 「國土の保持者」と云ふ意味に於て、從來「守護職」と譯されて居たのを明に會得した次第を告白せねばならない。

以上の如く、波斯を以て便宜例にとつたが、他の地域に於ても、この種の再吟味を要するものが多少の差はあるとも存するであらう。

この意味に於て、特に古代埃及に關して筆者の研究未だ充分とは云へないが、以下検討をなすは強ち無意味なことではなからうと信ずる。

固より、埃及の繪文字及び、その簡單化された字母を以て綴られる言語には、完全なる母音を明示して居ない。この點に由來する困難、差異は止むを得ないとしなければならぬ。例は有名な神 Amun は實は、母音の存在を示

オシリス (Osiris) か サラミス (Sarapis) か

す字母と、m と n との音が記されて居るだけである。従つて、アメン、アムン、アモンとなるは收める母音の如何に依る事である。そこでこの種の問題は、埃及語そのものの問題で、後に希臘字母を以て母音を示さんとし、希臘語にない音を記すために七個の特殊文字を造つたコプト語 (Coptic) が起つた所以であるが、今はこれらには觸れない事にした。



(註 1) 英語の *barbarous* は第一の意味が「野蠻なる」佛語の *barbare*、獨逸語の *barbarisch* もさうである。

(註 2) 最近制定された羅馬字綴とは差異がある。


(註 3) この言語の最も盛んに用ひられたのは、紀元三世紀の頃で、土着の基督教の修道僧の手に成る事が多かつた。回教徒の埃及征服と共に (六四〇年)、漸次この語の使用は壓迫せられ、十六世紀には日常語としての生命を失つた。その間にサイティック (Saitic)、アクミーミック (Akumitic)、ボハイリック (Bohairic)、ファイウミック (Fayumic)、メンファイティック (Memphitic) の如き方言が起つた。










(三) 事物名に就て

古代埃及を説く者が必らず口にすると云つて過言でな


い事物の「」として、ピラミッド(Pyramid)がある。ヘ
ロドトスはこれをピラミス(Puramis Gr. [Pyramis])とし
て居る。^(註1)ところで此はペル・アム・ウス(Per-am-us) 





「」である。その意味は「傾斜面ある建造物」で、希臘人が、この偉大なる建築を仰いで、その特徴を捕へた説明に過ぎない。如何にその要領を把んで居ても事物の外観的解釋である。^(註2)

然らば埃及人は如何にこれを見たか。多くのピラミッドを現す語がある。アアー(Ea) 、ベルベル(Ber-ber)  、更にピラミッドの地域神そのものと看做したものにアアートト(Atet)  があるが、どうも何を意味するか、明でないが「偉大なる」を意味するかと想像される。しかし別にアブ(Ab)  とあるは、「被心隠す」「逃れる」「進み出る」と云ふ動詞から由來したもの、ムル(Mr)  は「死者の保護者神」^(註4)の謂である。筆者はこれらの意味を以てピラミッドに臨みたいのである。


オベリスク(Obeisk Gr. [obeliscos])は「失れるもの」の

謂で、これも外観的説明にすぎない。元來之は太陽神ラー(Ra)を象徴する石柱であり、最上部は、小型のピラミッドを頂げるもの、埃及人が之をトクン(Thun) と呼ぶが、これは「藏す」「隠す」の動詞より由來した。

この意味は太陽神を象徴化せるを示すものである。^(註5)倫敦テムズ(Thames)河畔にあつて煤煙に黒ずみ、紐育の中央公園に百年を経ずして、埃及にある數千年以上に破損され、その他、君府に羅馬に、比較的新しい都市の裝飾物となつて居るオベリスクに對しても、單に「光れるもの」の程度を脱して太陽神の象徴として會て埃及人が崇拜した意味に於て見ることにしたい。

日本語の舊約聖書にバロ(Pharaoh)と記されて居るのは決してある特定の埃及國王を示す固有名詞ではなく、ブル・アア(Bu-aa)  、即ち、「大なる建物」の意味、これが轉じて普通名詞としての國王を指すのである。^(註7)

其他、我國人の口に屢々のほるスフィンクス(Sphinx)の如き、希臘人オイディプス(Oedipus)に謎が解かれた

ために、岩上より身を投じて自殺したと云ふのは女面獅身なるが、埃及にては獅身なるも、人面もあれば又は獸面もある。スフィンクスとは希臘語の「絞殺する」*σφάττειν* から來たと云ふ説があるが、それは兎に角として、埃及にては、斯くも恐しいものでなく、フ(Pu)  と呼ばれ、これは「地平線上のホルス」Hr-m-hut である。これも希臘人はハルマキス(Harmachis)として傳へて居る。即ち希臘人のスフィンクスと外觀上類似して居るが埃及人には餘程違つた意味を有して居ることに注意したい。第十九王朝の始めに造られたテーベのムート神殿の參道に石人石馬の如く整列して居るのは有名であるが、しかし、これが祀られた神祠もあつた。^(註9)

パピルス(Papyrus)とは特殊なる植物で、書寫用の材料を造つた。この語が、歐洲の語にも用ひられて、英語の paper 獨逸語の papier、佛語の papier 等、夫々紙を意味する語になつたのは有名であるが、パッチ(Badge)はその由來不明として居るが、^(註10) バブ(Pap)は「草」、イル(三)は「川」で「川の草」を意味し、埃及人のツフ(tuf)

オシリス(Osiris)かサラピス(Sarapis)か





と名附けた草を以て造つたのである。


以上、極めて僅かの例を擧げるに止めて、次の項に移ることにする。


- (註 1) Herodotos: Bk II 125. (Hdt. Teubner, Leipzig 1876 S. 106)
- (註 2) Zeitschrift für Aegyptische Sprache u. Altertumskunde = Z. Ä Bd. XII. S. 148
- (註 3) Budge: Egyptian Dictionary London 1920 p. 118 b.
- (註 4) Gardner: Egyptian Grammar: Oxford 1927 p. 544 a.
Erman u. Grapow: Aegyptisches Hand-wörterbuch; Berlin 1921 S. 66
- (註 5) Urkunde IV 366 13
- (註 6) Gen. XII, 14-20 &c
- (註 7) Erman u. Grapow S. 53.
- (註 8) Budge: p. 469 b.
他に P. 752 a に シムス (shsp) の稱呼がある
意義不明。
- (註 9) Ditto: p. 239 a.
- (註 10) Budge: Mummy, London 1925 p. 171.

(四)地名に就て

ブレステッド(Breasted)の名著、埃及史^(註1)に在る地圖に依つて埃及の地名を見るに、古代埃及人に稱へられたと考ふべき地名が殆んど見當らない。今、數ヶ所について觀察する事にしたい。


先づ希臘人の傳へたものとしてメンフィス(Memphis)であるが、本來、この地はメン・ネフル(Men-nfr)  即ち美しき(ネフル)住家(メン)である。これはオシリスの墳墓の所在地なる事が解る。^(註2)更に、メンフィスについては、メカ・タウイ(Meh-tauui)  の異名もあるが、メカは、衡器即ち天秤の意味、タウイは二つの地、この場合、上埃及と下埃及を指す。斯くして兩地の接合點として要衝なるを示して居る。茲にメンフィスの宗教的、政治的に重要なを悟りたいのである。尙、種々なる異名があるが、煩雜を避けて省略する。次にテーベ(Thebes)を見る。この地名は希臘本土に於て有名なる都市國家がある。しかも希臘羅馬の時代には、ディオスポリス・マグナ(Diospolis Magna)と呼ばれ


て居た。然らば、何故にこの地が斯く稱せられるに至つたか。勿論希臘のテーベの名が移されたのであるが、これについて、現在カルナック(Karnak)及びルクソール^(註3)と呼ばれる神殿の遺趾の多い、ナイル東岸の地を、古代埃及よりアプタイ(Apu)  と稱せられて居た。ところが、この地名がコプト語でタペ(Tape; Coptic [ⲧⲁⲡⲉ])と訛つたのを、更に再轉してテーベとなつたと考へられる。若しこの推定が正しいとすれば、この名の用ひられ始めたのは、決して古代埃及の第十二王朝乃至、第十八王朝の時ではない。餘程後世、恐らくは希臘文化が埃及に榮えた後の事と見て差支へなからう。

扱、テーベの古代埃及人によつて、ヌト・アメン(Nut Amen)  即ちアメンの市と種せられた。聖書にはヌトを單にノ(No)と示し、又はノ・アメン(No-Amen)^(註4)とある。屢々ヌト「都市」を以て示された。この點如何に重要なかが知られる。アラビヤに於けるメディナ(Medina)も「都市」を意味するが、國土の首都と云ふ意味で、希臘語の *ἡ πόλις* 羅典語の *urbis* に當る譯である。

ホメロス(Homeros)既にその繁榮をとき(Hias IX 381)

希臘人ディオドロス(Diodoros)は「この市に對して、「百門」(Hekatompylos)と呼び、その殷賑の様を語つたが、^(註6)



しかもストを見るのが、希臘的に解したるがためにオシリスの母としてのヘラ(Hera)を考へその結果として、空の女神たるヌト(Nut)  と解するやうになつた。これは全く誤りと見なければならぬ。(註7)

テーベが重要なるは、その異稱の一なるネス・ト・ネウイ(Nest-Neu)  即ち「兩地の王座」と云ふ名稱より知らるべきである。殊に西方亞細亞に經營の歩武を進めた第十八王朝に於ては、これが上下埃及を意味せず、阿弗利加と亞細亞とを考へたものと云はれて居る。

更にヘリオポリス(Heliopolis)は「太陽神の市」なるが、これはアン(An)(繪文字現し難きにより略)と埃及人には呼ばれ、聖書ではオン(On)と記されて居る。^(註8)

その他、ポリスの附加せられたるヘルモポリス(Hermapolis)、パノポリス(Panopolis)等の如きは希臘名である事は云ふ迄もない。従つて固有の埃及名とは差のある

所以である。

最後に埃及の南方の地名にヌビヤ(Nubia)と云ふのがある。埃及人の稱呼によれば、クニ(Kuni)  である。然も、ヌブ(Nub)  「黄金」に「地」を意味するが附加された混血兒的の語である。

(註 1) 手許にある左記を採る。

Breasted: History of Egypt, New York, 1919.

Ditto: Geschichte Aegyptens, Leipzig, 1936.

(註 2) Z. A. XLIX S. 130.

(註 3) アル・ウクヌーン(Al Uqnun)即ち「宮殿」の謂を有するヌラビヤ語が地名となる。


(註 4) Ezek. XXXI 4.

(註 5) Nahum III 8.

(註 6) Diodoros: Bk I 45.

(註 7) Z. A. XLII SS. 142-3.

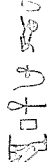
(註 8) Gen. XLI 45; so: XLVI 20.

H 𓆎(𓆎𓆎𓆎)と明示するもの  Jsa, XIX 18.

(五)人名に就て

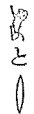
古代埃及を通じての國王、貴族、將軍、その他の名を列擧して、これらが如何に希臘的に傳へられて居るかを

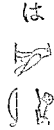


檢することは、餘りに懶い仕事である。素より、人名によりて、ある神に對する信仰を見ることが出来ることがその者の業蹟をさぐる手がかりにもなるが、これは本稿に於ては省略したい。










そこで、主として、埃及人でない外國人の名を繪文字を以て表はす事に就て述べる事にしたい。第一に考へられるのはクレオパトラ(Cleopatra)である。これは種々示されて居るが、 (Kloptra)を採つて見るに、母音の不完全なることは既述の通りであるが、元來、希臘文字で記さるべきを、埃及統治の必要からして、強いて繪文字に宛てた程度にすぎない。ところで之を以て埃及繪文字の説明に用ひられ、表音文字たるを知るやうにとあるのを屢々我國の書物でも見受けるが、これは埃及繪文字にとつても甚だ迷惑である。











例へば、蒙古の人名を強いて漢字に宛て、これを以て漢字の性質を説明せむとすれば、必らず識者の笑を買ふ事であらうが、蒙古語と支那語との差異如何は知らないが、埃及語と希臘語との差異は確かに大いなるものがあ






る事を知らねばならない。埃及繪文字を説明するに適切なる人名がいくらでもあるではないか。何を苦んで希臘人名を以てするのであるか。殊に埃及語の音では、我國語と同じく、ラ行は一つである。従つてももゝも區別なく

 とを置換たとて差支へない事も附加したい。マケドニヤ及びプトレミー兩朝の歴代の王、並に王妃の名が、繪文字で示されて居るが、希臘語の音の或るものは、無視したり、よい加減に取扱はれて居る。素より王朝としては形式的に名を示した程度であつて、今更、事々しく舉ぐるの要がないかも知れないが、如何に形式的なるかを明にしたい。

例へば、アレクサンドロス(Alexandros)は  (alexandros) と示されて居るにすぎない。プトレミーのソテル一世(Soter I)の場合には、 (Pulmis) であり、フィラデルフス(Philadelphus)の場合には、 (pulmis) となつて居る。この小異は繪文字より視れば、dとtとの區別を無視、

混用し、唯、幾分の差異を以て、プトレミーの二世と二世を區別して居る。フィロテラ(Philotera)の場合には、 (P)  (P)  (P)  (Ph) の音を f として示すならば、 を以て示し得るに拘らず、ph が P に近いと云ふので、P で済して居るのかも知れぬ。尤もマケドニヤ王朝のフィリップ・アリダエウス (Philip Arideus) に就ては     (philitipus) とあり、P と h とはその儘、逐字母的に重ねて示されて居るが、u の音を無暗に挿入して居る事になる。

此等は埃及的に王者の威嚴を示すむと cartouche にその名を收めたものであるが、更に降つて羅馬帝政時代になると、アウトクラトル (Autocrat) が、     (Autocrat) 及び、カエサル (Caesar) が      (Kaisar) とし、cartouche の中に納められて居る。此は恐らく皇帝としての威嚴を加へた意味であらう。



併し、ティベリウス (Tiberius) は      (Tiberis) となり、正確には表はされて居ない。ヴェルス (Venus) の如

きは、益々不明となつて(繪文字現し難きため略) (Uana) となり、コンモツス (Commodus) は(繪文字現し難きため略) (Kamatus) と云ふ風に變り、デキウス (Decius) が(繪文字略) (takias) となつては一寸見當もつかない有様である。


我等は幸にして斯ゝる材料によつて羅馬史を研究しなくともよろしい。しかも、若しこんな材料の上に羅馬史が築かれたとすれば何と考へるであらうか。この考を逆にして、かゝる變改の行はれたる虞のある希臘語の材料の上に埃及史を樹てる事の危険も悟らねばならない。



(六) 神名について

神々の名稱は埃及では甚だ多い。仔細にこれを擧げれば數千にも及ぶと云はれて居る。そこで前項と同じく逐一列擧を避けて、主要なる神々について例示的に説く事にする。

先づオシリス (Osiris) を見る。勿論これは希臘名である。埃及人はアサル (Asar)  と呼んだ。中には母音の解釋によつて、ウシル (Wsr)  と云はれて居る。こ

れが意義に就ては今は觸れない事にしたいが、扱、希臘人がアピス(Apis)と合して、サラピス(Sarapis)と云ふ神を崇拜したのは、實はアサルとアピス(Asat+Apis)が合し、最初のアが脱落してサラピスと成つた事を注意したいのである。尤もアピスとて希臘人の呼んだ所のもの埃及人は實は、ハーピ(Hapi)と呼んで居たのである。

次にイシス(Isis)はアスト(Ast)となつて居る。ホルス(Horus)も、實はクル(Heru)、又はホル(Ho-he)である。尤もこの態は中王國以後主として用ひられたところで、古い時には  (Hm)であつたことが、ピラミッド・テキストで知られる。(註1)

そこで、我々はハトル(Hathor)と稱せられる女神でも元來この神は愛と實との女神として、希臘人には屢々アフロディテ(Aphrodite)と同一視された程であるが、實は、ハトホルとトトとを分離して讀まねばならない事を知るのである。この神は  又は  として繪文字では示されて居り、Hathor 即ち「ホルスの家」の

謂になる。これが、牛と關聯があり、この女神の耳か特に牛の夫れを以て現される點より、その屬性等を考へる上にも役立つものと解すべきでないか。

最後に、ネフティス(Nephthys)と云ふ女神を挙げたい。これもネプト・フト(Nepht)と繪文字によれば讀むべきである。即ちネプトは「女主人」、フトは既述の通り「家」である。即ち「家の女主」となる譯である。

この種のもは叙上を以つて止め、屬性その他の方面より録すべき點もないではないが、本稿にては唯々神名の範圍に限る事にしたい。

(註1) Pyramid Text 1500.

(七)希臘文化の浸透と希臘的考察

叙上の如く説き來ると、埃及に關する智識が希臘人の手によつて傳へられた點が極めて多く、しかも、希臘人が幸にして、充分埃及そのものを理解して居る場合とは、かく、屢々皮相的乃至外觀的の説明に過ぎない場合も相當多いことが注意されると信ずる。

古代埃及が末期即ち、埃及學者の後期と叫ぶ、第二十
六王朝を中心として、一時文化の復興を見たときがあつ
た。しかしこの復興の氣運は多分に希臘文化の浸透を受
けた結果である。この佛は明に當時の藝術に於て見られ
るところ、ナウクラティス (Naucratis) の如き希臘文化
の淵藪とも云ふべきである。

更にマケドニヤ王朝、プトレミー王朝の支配を見るに
前者は世界帝國建設上の一區域として、埃及を視たもの
で、如何にもアレクサンドリヤ (Alexandria) の經營の如
き、多大の苦心を拂つた事が知られるが、それだけこの
港市を重要視した。しかも、これは帝國の一大要地なる
が故にさうであつて、單に埃及支配のためのみでなかつ
た譯である。従つて Alexandria ad Aegyptum の觀念
は既にこの時にあつたと看做して差支へなからう。

後者、プトレミー王朝の場合に於ては、埃及はその國
土としての主要部分たるは勿論であるが、しかしアレク
サンドリヤを特別地域として取扱つた事は云ふ迄もな
い。

序いで羅馬領となつては、帝國の一屬州、しかも、そ
の穀倉としての取扱を受け、この意味に於て嚴重なる監
督の下におかれた。

これらの時代を通じて、埃及について何等かの著作を
残したものは、大部分は希臘人であつた。羅馬領時代に
於てさへ、ブルタルコス、ティオドロス、ストラボン、
ポリビオス等は希臘人であることを悟らねばならない。
しかも既述の通り、希臘人は自らの文化に大なる誇りを
持ち、政治的勢力の衰亡したる後と雖も、その教養ある
所を以て文化人なりと稱した。

斯くて、埃及を見る場合、縱令ヘロドトス程の事がな
いかも知れないが、希臘人として埃及の特殊性を如何な
る程度まで見得て居るだらうか。無論、希臘人が埃及を
傳へるに際して、埃及の特殊性を無視してもよいとは云
はないが、傳へることは傳へても果して、正しく傳へて
居るかが問題である、希臘的なる考察による特殊性なら
ば吟味を要する譯である。

(八) 埃及の特殊性

古代埃及の研究に志してより、相當の年月をかけたが、言語解釋の力が遅々として進まないのは筆者の素より遺憾とするところであり、繪文字について説をなすのは自ら恥づる次第であるが、しかも、古代埃及の研究は繪文字そのものより始めるの必要あるを益々痛感するものである。凡そ歴史の研究にあたり、當該語學より進むことの緊要なるは今更、論を俟たない所であるが、希臘語を以ては現はし得ない方面がある。

我等が「死者の書」を讀んで、餘りに消極的なる道徳を説けるのに驚く者であるが、これは古代埃及人の日常生活、延いては死後、末世の生活に對する態度を見る必要がある。

希臘人は神を見る場合にも「人が萬物の尺度」と云ふを適用した。埃及人の神々に對する考へは、甚だ複雑であり、少くとも希臘的ではない。埃及の神像に就て觀察する者が、直ちに知る通り、人身を以て現はされたる、オシリス、アトム(Amm)の男神の他、イシス、ネフティスの女神もあるが、中には、イシスの如く坐席を、ネフ

ティスの如くその名を意味する繪文字を頂けるものがある。その他に、ホルスの如く鷹の頭、アヌビス(Anubis)の如く豺の頭、セクメット(Sekhmet)の如く牝獅の頭、トト(Thoth)の如く紅鶴(Ibis)の頭を、人身の上に頂くものがある。中にはツエリス(Thueris)又はタ・ウルト(Tauret)と呼ばれる女神の如きは、頭も體も全部、河馬を以て示されて居る。後には河馬を示す埃及語のレルト(Rert)で云はれることがあつた。更にセルク(Serk)の如きは人頭で、人の手があり、しかも胴は蝸を以て示されて居る。これは甚だ多岐なる埃及人の信仰を物語るもので、この種の問題は別の機會に譲らねばならない所であるが、動物によりて神像を示すことは、國王崇拜に牴觸しない意味に於て、盛んに用ひられたと云はれる。國王も屢々動物の尾を自ら附けて儀式に臨み、その堅忍の精神を現はしたと見られる。斯くしてラーの如きは、人頭人身もあれば、鷹頭人身、人頭鷹身、鷹頭鷹身とあらゆる場合が存在して居る。

しかし、特異の例と云ふべきは、インホテップ(Imho-

tep) 即ち希臘人のイムテス(Imuthes)なるが、これは本來、實在の人物で、第三王朝の有力なる王、ゾセル(Noser)に仕へて大功あつた重臣で、教化に、建築に、醫藥に、その各方面の才能を發揮したるが、彼に對する尊敬が崇拜となり、次第に神化されて行つたのである。これが第二十六王朝になると神々と同じやうに取扱はれて居る。(註2)

尙、メルト(Mert)の如く、ナイルの「氾濫」を神としたものもあれば、マート(Mat)の如く「眞理」「誠實」を神にしたのもあると云ふ有様で、希臘人が如何なる程度に之を消化し得て記録したかは、餘程注意せねばならない。

ナイル流域の自然に忠實に服すると共に、豊饒なる土地を耕して怠らなかつた古代埃及人は、個性を没して神に服従し、之を崇拜した。この態度を以て支配者たる國王に對しても、絶對の權力を認め、之を讃仰し、之に依據した所以である。

されば、埃及の思想や、宗教には、保守的なる要素が

オシリス(Osiris)かサラピス(Sarapis)か

甚だ多い。又、恵まれた自然の下に、平和なる生活を送るために、來世に對して現世の延長として見る念が甚だ強い。現世の幸福を得たる者は來世も又、斯くありたいと望むことによりて、來世に備へる所があり、現世が思はしからぬ者は、せめて來世の準備をしようと計るのである。従つて第十二王朝になつてオシリス信仰の中心とアピドス(Abydos)がなると、上は國王より、下庶民に至る迄、復活、不滅の祈願がかげられこの地に自らの墳墓を設けむとし、これが望まれない者は小さい碑石を造つて奉納して僅かに満足した。

これらの祈願文によりて如何に來世を重視したかを伺はれる。

埃及が死の國と觀られるのは、庶民がさほど死を恐ろしからず、死は力なき者の逍遙する道とした。そこで、これは寧ろ花の香しき床と考へた。木乃伊(Mummy)を造りて、來世へ行く備へをなし、これに多くの呪文を以て安全に目的地に達したる上、清淨無垢なる者として認められる準備をなした。

ピラミッドの造營者の事業は、實に一大消費をなしたるもので、經濟的なる負擔の多大であつた事は、認むべきではあるが、しかし庶民は當時の國王を暴君と看做しては居なかつたのであらう。國王は恐ろしき神たるよりは、善き神なるを理想とした。弱者を助け、過誤に陥つた者に同情した。オシリスは埃及の國を支配した一の國王の姿を以て語られて居る。善を代表したものであり、惡の代表たるセト(Set)の奸計により、遂に殺されたが、蘇生して幽界の主となつた。これ來世に行くものが、オシリスに屬する者、乃至、自らオシリスと稱へる所以である。

ナイルの河はオシリスで、地中海はセトであると比喩的に見た。前者はその兩岸を潤し、農業を助け、人畜を養ふが、後者は亂暴にも土砂を陸に押し上げ、沼澤多き礫尙なる地を造つたとした。かくして、埃及人には來世を重んずると共に、現世を基礎とした實利的なるものが現はれた。死者に對して遺族は大に供養をつとめ、あらゆる生活必需品を供へた。古くは死者のカー(Ka)に

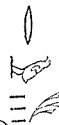
眞物を以て供したが、漸次、テラコッタや、木片で模型を造つて代用とした。之がために遺物として傳はり、史料をのこして居る譯である。第十八王朝の墳墓の中にはテラコッタの菓子があり、明に專用者の名が記されて居る。他人の使用を禁じた用意周到さには驚くの他はない。


來世でも現世の如く、仕事が賦課されて居るが、此處では、唯勞作すれば必らずこれに對する報酬、主として收穫が與へられる。従つて飢饉等の災厄は働く者にはない幸福境が説かれて居る。但し、この勞作すら免れむがためにウシヤブテイ(Ushabti)が後に盛んに現はれたが、茲には詳述を避けたい。

斯くして、子弟を誠める教訓書の如き、實利的なるものが多く、庶民として許され得る書記の職務に就く意味に於て勉學が奨勵されこれがために、多くの生業に従事するものの苦痛が極めて詳細に述べられて居る。希臘人によれば奴隸の手に委ねらるべき仕事と考へられるものを埃及にては重く視る場合も少くないのである。

埃及の自然を注意して、これを背景としてその藝術を觀察すべきにある。古王國に盛んに造營されたピラミッドは、平野盡きて、沙漠に接する邊りに巍然として聳え立つたつことがその意義を有する譯で、その人目を奪ふ高さが仰がれる譯である。然るに中王國以降、テーベが政治中心となつては、一方經費の關係もあることながら、側に屹立せる斷崖があるため、ピラミッド造營の効果をななくする事が大であり、ために神殿建築に力が注がれ、その中にピラミッドは痕跡的存在と成つたのである。

埃及人は來世を送る場所としてアアル(Aaru) 



②  が擧げられる。この語は本來「蘆」を意味

する語である。テルタの北方にあるブシリス(Busiris)と云ふ地名があるが、これはオシリスの墓のある地なるを意味して居るが、これが蘆に富んだ地域で、これからアアルも説かれて居る譯である。従つて之を以て直ちに希臘人の云ふエリゼーの野と同じ立場で解釋することは不可である。

以上の如くにして希臘人の手によりて傳へられるには

埃及が餘りに特異なる數々を有して居る事に注意を拂ひたい。

(註 1) Z. A. XXXVI SS. 147-8.

(註 2) Breasted: His. of Egypt. p. 576.

(註 3) 一例として左記を擧げる。

Amenem-apt の教訓書

Plahoteb, Passim XXXII-CCXXXIV

拙稿古代埃及第十二王朝の社會狀態に就て(史林第十七卷、第四號、五四五—五四八)参照。

(註 4) Budge: Egyptian Dictionary p. 21 b.

(九) 研究法上の立場

古代埃及を研究するには、希臘的に見るべきでない事を以上述べ來つたが、さりとて、決して「除けよ、汝等羅馬の著作者よ、除けよ汝等、希臘人たちよ」(Cedie Romani scriptores. cedie Gran) ^(註 1) を叫ぶものではない。唯希臘的に見ることは誤り傳へられる危險が相當藏せられる事を云ひたい。希臘人が埃及を觀察し、埃及人の優秀さを悟りつゝも、その眞實を充分に解し得なかつた點である。故に、埃及を知るために、埃及の史料を見ると共に、大に豊富なる希臘の史料を用ふるは決して排斥す

べきでない。しかも餘りに希臘的となれる解釋は避けて正しい埃及を見るべきために努力すべきである。

希臘を研究するためには希臘人の傳へたる史料が極めて豊富である。従つてこの種の史料を以て充分であるがしかも、他の方面に希臘を理解せしむる史料があらばよろしく利用すべきである。今や、希臘の研究に於て、希臘以外の立場から觀察されて居る。例へば、波斯戦役に就いて見ても、波期の武力的侵入は紀元前五世紀の初めに於て、これを略撃攘する事が出来た。しかもデルファイ(Delphi)を占據した波斯はこれに何等害を加へないで、盛んに悲觀的なる神託を發せしめた。曰く「世界の果にのがれよ」曰く「木の壁によれ」の類である。幸にサラミス(Salamis)の海戦に希臘が戦勝を博したから、「木の壁」とは艦船を指すものと解してよいであらうが、甚だ非愛國的なる態度をデルファイが採つて居るではないか、この背後にあつて絲を操るものは波斯である事は、智者を俟つて始めて知るべきでなからうと信ずる。されば思想戰の方面より見るとき、波期的の立場から見ると必要もある

筈であり、更に波斯のダレイオス(Darius)、即ち波斯の金方は、スバルタ(Sparta)をしてアテナイ(Athene)に抗せしめ、前者制覇すれば、テーベを動かして衝かしめて居る。斯くて、希臘諸國が對立分争の結果、倦みつかれるに至つたのは、波斯が經濟力を以て希臘を破り得たと見るべきで、アリストフーンネス(Aristophanes)の喜劇にはその片影が傳へられて居る。されば希臘を知るために波期的立場をも忘れることが出来ない。

これと同じ様に、埃及に大いなる影響を與へたる希臘的立場を注意すべきは勿論なるが、これは埃及を知る意味に於て觀るべきであり、決して希臘化された埃及をその儘、許容すべきでないことを力説したのである。

プルタルコス(Plutarchos)の「イシスとオシリス」に就て(De Iside et Osiride)に於て、大に埃及の象徴的説明を取扱つて居るが、これを説くに當つて必ずしも埃及的のみとは云へず、希臘的なるものが見える。詳細は他日に譲りたいが、中にはオシリスとセツトを意味するティフォン(Typhon)との争を説くに當つてゾロアスター

(Zoroaster) 教の理論たる善惡抗爭より述べ、「原因なく
ては何物も發生せず、(中略)善惡は夫々依つて來るべき
本源と原理がある」として居る。^(註2)

(註 1) S. A. Propert. II 34, 65.

(註 2) Plutar, § 45.

(一〇) 結語——サラピスのよりオシリス的に

以上述べた所を以て、今更結語を書く迄もなないかも知れない。表題には「オシリスか、サラピスか」としたが素より、本稿が或る神像が孰れに屬するかと云ふ考證でもなく、或る時代、又は地方の信仰に於て、この二つの神の孰れが優勢なるかの比較でもない。

プトレミー王朝に於て、メムフィスに於けるサラピス神殿で、希臘人の母娘が二人を棄てた男を咒つたとあるが、かゝる例は乏しくない程、サラピスは多くの希臘人の間に崇拜されたのは云ふ迄もない。最初尊大振つた希臘移民も、時と共に埃及人との間に混血も生じて行つた。中には埃及流の兄妹婚もあつたであらう。プトレミー王家が、これを行つて居るのである。混血兒は希臘名

を名乗つて居るが、埃及名もすてずに用ひて居る場合が尠くはなかつた。斯かゝる事情が、希臘人の埃及に關する著作にも見られる譯である。

この意味に於て、サラピスのなるものを避けて、オシリス的なるものに還元する事に依つて古代埃及を見たいのである。歴史の流れよりすれば、オシリスがサラピスに變化して行つたのであるが、古代埃及を見る限りに於て、一度はオシリス的なるものに還元する事が、極めて望ましいと信ずるのである。現今ヴァチカン(Vatican)宮殿にナイルの彫刻と稱するものがある。老人が横臥せるを十數人の小供が側に居り、沿岸の産物を持ち、その高さは増水量を示すと云ふが、これを以てナイルを埃及的に現すものと見るには不滿なるものがある。

斯く見るに於ては、問題は單に古代及の研究を餘りに希臘的なるものでなされる事のみに限らず、一般歴史研究完全般に互つても、或る國、或る地域を研究せむとする場合、先づその國、その地域に行はれた言語の研究より

始め、その言語で記された史料より進むべきと共に、縦令、史料皆無又は不充分にして、他によるの他なき場合と雖も、必らずこれを理解し、史實を把握する態度は充分周到なる注意が必要ではなからうか、然らざれば、全然誤るとは云へない迄も少くとも、歪曲されたる或るものが加はる虞があると思ふ。

牛歩にも比すべき、古代埃及につき研究を進めて居る裡に經たる管見を述べて叱正を仰ぐと共に、叙上の機運が既に現はれ將來更に盛んに興らむとする兆は誠に悦しいことである。

埃及繪文字の印刷については、活字節約その他の都合上、時代を無視し或は單に同音の故を以て使用し、transcriptに於ても不十分な點もあるが、我が國の現狀から見て御宥怒を仰ぎたい。(昭二二、一一、二四稿了)